

受け継がれる営みを知り 土と共に生きること

Le mode de
Karuzawa

軽井沢暮らし



ギタリスト
尾尻 明子さん

ご主人とともにプロギタリストとして、国内外の大きな舞台上で演奏を続けてこられた明子さん。その音楽との向き合い方は、軽井沢に越してから大きく変わったといいます。明子さんのご両親や3人の子どもたちと一緒に、季節の収穫を喜びながら過ごす日々。カーネギーホールや津田ホールでリサイタルを重ね、世界じゅうを忙しく飛び回るご夫妻にとって、軽井沢の自然やそこに住む人びとの暮らしがりは、その哲学をも転換させる力をもっていたようです。

地区の人に教わったこと

八風山の山腹、大きな木々に守られるようにして佇むログハウスが、明子さんとご家族の住まいです。ご主人とともに、ギタリストとして国際的に活躍されている明子さんが、東京から別荘地「八風」に越してきたのは11年前のこと。長男・大陽^{まさひる}くん誕生を前に、先にこの地へ移住していたご両親を頼ってきたのがきっかけでした。

「東京でのライフスタイルを変えるつもりはなかったんです。でも、ここに暮らし、大陽が生まれたことで、自分の中の価値観がすっかり変わってしまったの」。

音楽ひと筋だった明子さんご自身も、ご主人もご両親もやりたいことを個人個人で追求していくタイプでした。その在り方に急に不安を感じるようになったのは「親から子へ、子から孫へ、受け継がれる命の流れを実感できたか



詩情溢れる演奏で国内外問わず高い評価を得ている明子さん。演奏活動は旧姓の「斎藤明子」名で行っています

ら。ポツンと自分があるだけというスタンスに、これだけののかな？と思うようになったんです」。

八風の里は、住所としては上発地の区内に当たります。その地区には四季折々の行事や先祖を祀る風習があり、季節の巡りに沿って畑を耕す生活がありました。新しく住人となった家族にも、過ごしやすいように接してくれる地元の人たち。代々の土地に根ざして生きる人たちと親しむうち、ひとりですべて立っているような心もとなさも癒されていく…。

「それに、ここは文化の成熟度もすごいんです。地区の人の主導で、毎年のクリスマスにはご夫妻でギターのミニコンサートも行っています。公民館の畳敷きの広間に、赤ちゃんからお年寄りまで大勢集まってくださって。誰もが手拍子をしたり口ずさんだり、思い思いに好きな曲



森の木々を身近に感じるリビング。ログの壁に貼られた子どもたちの絵も、温かな雰囲気です

夢を実現させたお家で個性的なライフスタイルを満喫する『軽井沢暮らしの達人』をご紹介します



上田の作家さんが作られた19世紀多弦ギターのコピーモデル。譜面台はご主人の生徒さんでもある木工作家さんに作っていただきました

森に響く心地よいハーモニー。「人と人とのつながり」を感じられる生活はお2人の音をも変えたきたといひます



人と人が結ぶ 有機的なつながり

そんな日々を重ねるうちに、仕事でのスタンスも少しずつ変わっていきます。「東京でのコンサートだと、主催者の方とプライベートな会話をすることはないんです。お

に反応してくれる。みんなが大きな家族みたいになりラックスして、本当の意味で、音楽を楽しんでるのが演奏して

付き合いもその場限り。でも、ここでは人と人との関係を長く続けることができる」。ギター教室で生徒さんがリングをつくっていると聞けば、畑を見せてもらってリンゴの木をオーナーになったり、木工芸の作家さんとアイデアを出しあって木製の譜面台をつくったり。150年前の音色を奏でる19世紀多弦ギターのコピーモデルは、仕事を通じて知り合った上田のギター製作者とご主人が共に作り上げたもの。さまざまな場面で、人とのつながりが次のステップへの後押しとなっていたのです。

「人からは音が力強くなったとも言われます。自覚はないんですけど、ただ、表現したいものは自分の中にいっぱいたまってきました」。大陽くんは春花ちゃん、美乃里ちゃんという2人の妹さんも加わり、八風での生活はいっそうにぎやかになっていきます。「畑や子育てをやっている中で、少しずつ地に足がついた生き方ができるようなって来たのかな。そうしたら自分の内面と曲とを、自然に素早く結び付けられるようにもなりました」。土地の自然や季節の実りが、音楽家としての自分をも大きく変えてくれたのだと、明子さんは何のてらいもなく晴れやかな表情で話してくれました。